

北海道師範塾 塾頭通信

「教師の道」

第946号 平成27年6月12日

続・繰り返される悲劇

5月29日、札幌市内で、64歳の母親（佐藤和子）が42歳になる自閉症の娘（由紀子さん）を殺害するという事件が発生しました。

こういう事件が発生する度に、「またか！」という思いを禁じ得ません。

老老介護に疲れた夫（妻）が寝たきりの妻（夫）を殺害するという事件は、今では後を絶ちませんが、こうした介護疲れが原因と思われる事件と今回の事件とは事情は異なるものの、社会から「孤立」しているという点で共通していると思います。

北海道警察は現在、佐藤容疑者の取り調べを行っており、詳細は分かりませんが、「自分が死んだら自閉症の娘が1人になるのが不憫だった」と供述しているといえます。

また、佐藤容疑者の首には刃物で切ったような傷があり、無理心中を図った可能性もあると見られています。

由紀子さんは江別市内の障がい者支援施設に入所しており、平日はこの施設で暮らし、週末に自宅に戻るといった生活だったようです。

障がい者支援施設の施設長によると、由紀子さんは温和な性格だったそうです。そんな娘を、佐藤容疑者はどんな思いで手に掛けてしまったのでしょうか。

北海道社会福祉事業団では、障がい者の自立を支援するための施設を多く運営していますが、それらの施設を利用している障がい者の保護者を見ていると、かなりご高齢の方々が少なくありません。

保護者の中には、障がい児を抱えているという現実から目を逸らし、我が子の養育を放棄してしまう人がいる一方で、背中がすっかり曲がってしまったり、歩く姿もおぼつかないのに我が子を施設まで迎えに来るような方もいます。

高齢の親がもう中年になった子どもの手を引いて帰宅する後姿を見ていると、親子の情愛の深さと同時に、切なさが去来します。そうした保護者の方々に共通しているのは、自分の体が動き、元気な内は自分で我が子の面倒をみたいという思いの強さですが、その強さはどこから来るのだろうと、私は何時も考えてしまいます。

「親としての子への愛情」、それは当然です。しかしそれ以上に感じるのは、責任感の強さといったものです。

我が子が障がい児として生まれたというのは、見えざる者の力、神の手の内にあ

る事です。誰に責任がある訳ではありません。まして、親に責任があろう筈もありません。しかし、障がい児の親には、我が子を障がい児として生んでしまった事への責任を強く意識しているのではないかと感じる事が、しばしばあります。その思いはまた、自分が生きて行く支えとなっているのかも知れません。

しかし、どんなに我が子への愛情が深くても、また、最後まで面倒を見続けようと思っても、自分は年々年を取り、自分の事さえ始末をつける事が難しくなっていくと思います。その時に、「一人残された我が子の行く末はどうなるのか」という思いが重石のように心に押し掛かって来るのだと思います。

この子は、一人残されても、周りの助けがあって幸せに人生を全う出来ると確信が持てる人は幸いです。しかし、その確信が持てなかったらどうするでしょうか。

いくら我が子といっても、その子を殺してしまう親の身勝手さは許されません。しかし、一人残される我が子の事を思い、「我が身の始末が付く内に子どもを道連れに…」と考えてしまう、そうした追い詰められた親の気持ちに、私達はもう少し思いを致す必要があると思います。

近所の男性は「変わった様子や悩んでいる様子は感じなかった（5月29日付朝日新聞から）」と述べていますが、肝心な事は見えない事が多いものです。

行政にも相談窓口は沢山あります。だから、「困っていたなら相談したら良かったのに」と思うのは当然ですが、責任感が強ければ強い程、自分の事で迷惑は掛けられないという思いも強いものです。それは結果として、社会からの孤立につながりかねません。そういう意味では、行政も地域の方々も、「困った事があれば相談して」というのではなく、こちらの方から積極的に関わりを持って行く必要があると、改めて感じているところです。

（塾頭 吉田洋一）